

変わること



松尾 豊

(東京大学大学院工学系研究科)

いろいろなものが壊れていくと思います。新聞、テレビ、大学、地域コミュニティ、倫理、常識。それらは Web を中心とする情報の流れの変化とグローバルな競争のなかで消えていきます。まず、このこと自体、ネガティブなことではなく、とてもエキサイティングです。人生一度しかないのですから、いろいろな変化を経験し、ゲームのルールが変わり、その中で勝った負けたと言っているほうがおもしろいに決まっています。「革命」のルールのないトランプの大貧民なんかおもしろくありません。

壊れていく中でさまざまなものが生まれ変わります。私は、いろいろなものが壊れていくのは、その本質的な存在理由が問われているからだと思います。例えば、大学は長い間ずっと国の最高教育機関でした。優秀な学生を試験で集め、1か所に閉じ込め、教育して卒業させ、その本質的な付加価値を検証する手段がありませんでした。広告も同じです。D社やH社がキャンペーンをやりましょう、1億円かけるとこんな効果がありますと言われてやっても、その効果を測定する手段がなかった。でも、そこにデータによる計測が可能になり、さまざまな技術による代替手段が生まれました。大学にいる身として甚だ不適切ですが、私は学生に、大学や大学院に行くなら海外に行けと言います。それと同時に、大学はなくなるよと言います。つまらない講義を半分寝ながら1時間聞くより、TED Talkの動画を10分見たほうが、よっぽど勉強になります。価値観が変わります。学会もそうだと思います。

壊れていくものが果たしている機能を分解したときに、例えば、情報流通(チャネルをもっていること)や知識やノウハウそのものの価値は低下してくると思います。逆に、より重要になってくるものがあり、それは、スタンプ機能、言い換えれば「認証機能」ではないかと思います。スタンプを押すため、認証するためには、審査が必要です。学会は、査読という審査プロセスを経て、論文というスタンプを押してきました。いろいろな賞を出してきました。人の紹介や推薦を通じて、コミュニティに入るべき研究や人を明示的・暗黙的にフィルタリングしてきました。この「審査機能」は、人工知能に関する非常に深い造詣がなければ不可能なもので、学会の本質的な価値の一つだと思います。

あともう一つ重要なのが、こうして押したスタンプがいかに価値をもつか、つまり、ほかのコミュニティにも価値が伝わる貨幣性をいかにもたせるかです。それが、パブリシティ機能だと思います。それは従来よりも対象に特化したもので、人工知能に興味がある人は、少なからず人工知能学会の発信している情報を見ている。人工知能と検索する人は必ず人工知能学会のページにたどり着く。人工知能学会の Facebook ページや Twitter アカウントをフォローしている。必ずしも多くの人が見る必要はないのですが、見てほしい人に届く発信力、その中で審査を経たものが広がること(それによって審査自体がまた妥当性の挑戦にさらされます)、このいわば「分断化されたパブリシティ」も、学会の本質的な機能の一つだと思います。Nature や Science, ミシュラン, 漢字検定, いずれもとても成功していると思いますが、私はこういったものに共通する本質的な競争力は、この「審査能力」と「パブリシティ能力」からなる高い「認証機能」だと思います。

もしかしたら、学会はより明確に認証機能を本質的な競争力としてもつ組織に生まれ変わるのかもしれませんが。学会の会員は、こうした機能をもつコミュニティで相互に助け合いながら、コミュニティから承認され、コミュニティに愛情を感じ、所属することに価値を感じるのではないかと思います。そこには、もはや従来の学会という姿は必要ないかもしれません。でも、より抽象的な意味で、今の学会が果たしている重要な機能を担っているものだと思います。

巻頭言で好きなことを書いてしまいました。こんなことを書いてよいのかどうかよくわかりません。また話の結論もよくわかりません。よくわかりませんが、既存のものが壊れて、本質的な価値を顕在化させないと生き残れない、そういった挑戦にさらされることはすばらしいことだと思います。私は人工知能学会が好きですし、こうした変化の中で、人工知能学会が、より抽象度の高いクラスとしての「学会」に変わっていくといいなと思います。

6月から新しく編集委員長を仰せつかることになりました。歴代の編集委員長の方の思想を引き継ぎ、魅力的な「学会誌」、「論文誌」っぽいものをつくっていきたいと思います。